

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520208

研究課題名（和文） 『大島筆記』を中心とする琉球船土佐漂着資料の基礎的研究

研究課題名（英文） Preliminary investigation of documents on a Ryukyuan ship that drifted ashore of Tosa: With a special focus on "OHSIMAHIKKI."

研究代表者

島村 幸一（SHIMAMURA KOICHI）

立正大学・文学部文学科・教授

研究者番号：70449312

研究成果の概要（和文）：『大島筆記』の最良の本である国会図書館蔵の『大島筆記』を、善本である山内文庫本と内閣文庫本と対校して翻刻した。併せて、『大島筆記』と同時期（1762年）の漂着資料「琉球船漂着記」（高知県立図書館蔵）や『大島筆記』の著者戸部良熙の随筆集『韓川筆話』（国会図書館蔵）から琉球関連記事を取り出して翻刻した。さらに、琉球側の主要な情報提供者である潮平親雲上に関連する新たな資料を家譜資料調査により収集して、潮平の人物像を考察した。また、『大島筆記』に記される伝承的な記事の考察をはかった。

研究成果の概要（英文）：

I have read, deciphered and rescripted "OHSIMAHIKKI" housed by the National Diet Library, known to be the most reliable and complete work describing the ship wreck, using as cross references versions in the Yamauchi and the Japanese Diet collections, whose qualities are highly recognized. I have extracted articles about the same ship from other documents of the same nature and from the same time period as "OHSIMAHIKKI"(1762), housed by Kochi Prefectural Library and "KANSENHITSUWA"(housed by the National Diet Library), a collection of essays by Tobe Yoshihiro, the author of "OHSIMAHIKKI". I have replicated the same rescripting process to them as well. Furthermore, I have also gathered new data on the pedigree and biography of Shiohira Peechin, who was on board the drifted ship and served as the primary Ryukyuan informant about the incident, in an effort to analyze his character. Finally, I have analyzed orally transmitted articles in "OHSIMAHIKKI".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
年度			
年度			
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、日本文学

キーワード：大島筆記 琉球船 漂着資料 清水浦琉球船漂着聞書 下田日記 宇留麻話

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 『大島筆記』は、近世琉球全般にわたる制度や地誌、民俗、習慣、言語等の文化的情報、及び琉球を通じた中国情報、さらには琉球と本土日本との文化交流を知る貴重な「聞書」資料であるが、現在に至るまで善本の翻刻が果たされていない。

(2) 『大島筆記』は、上記に記した貴重な「聞書」資料であり、さらに琉球の正史には記されない貴重な記事（例えば、「十五箇間切五千人」の強訴事件等）が記されているが、それらの記事を総合的に分析した本格的な研究がない。

(3) 『大島筆記』附録の「琉球人」の文芸（琉歌「琉球歌」、和歌「琉球人和歌」、和文「雨夜物かたり」「永峯和文」）に関する研究がなされていない。

(4) 琉球船の土佐国漂着は、少なくとも公式記録（藩主公紀）が4回ほどあるが、それらの資料収集、及び翻刻が充分になされておらず、それらの漂着資料との関連を踏まえた『大島筆記』の研究がなされていない。

## 2. 研究の目的

(1) 『大島筆記』の善本を翻刻して、研究の基礎的な環境を整える。

(2) 翻刻したテキストを元に『大島筆記』に記される近世琉球の文化・文芸・言語全般にわたる研究を行う。

(3) 『大島筆記』の著者、戸部良熙と琉球側の主要な情報提供者、潮平親雲上等（翁土璉）との交流を通じた、琉球と日本との文化交流を探求し、併せて近世期の本土日本の琉球認識を探っていく。

(4) 『大島筆記』以前の琉球船土佐漂着資料（1705年の漂着）である「豊房公紀」第21巻「宝永二年七月十二日」記事、写本、土佐山内家宝物資料館蔵、「高知市民図書館史料 土佐清水浦琉球船漂着聞書」『頓狂亭探古1 幡多地方古文書解説集』小野義広、自家版、1996年刊、「清水浦琉球船漂着聞書」『土佐群書類従 災異部漂着部』第7巻、高知県立図書館、2005年刊他や、『大島筆記』以降の漂着資料（1795年の漂着）である「豊策公紀」第26巻「寛政七年五月二十六日」記事、写本、土佐山内家宝物資料館蔵、「下田日記」「宇留麻話」『土佐群書類従 災異部漂着部』第7巻、高知県立図書館、2005年刊他を分析して、『大島筆記』の位置付けを明らかにする。さらに『大島筆記』と同時期の琉球船漂着資料である「豊敷公紀」第134

巻「宝暦十二年七月二十二日」記事、写本、土佐山内家宝物資料館蔵、「琉球船漂着記」写本、高知県立図書館蔵等を分析比較して、『大島筆記』の資料としての基本的な性格を明らかにする。

(5) 『大島筆記』が叙述されるに際して参考にされた冊封使録『中山伝信録』徐葆光、1721年刊を検討して、『大島筆記』の構成を考察する。

(6) 『大島筆記』「雑話下」に記された琉球を通して得た中国情報を、『琉客談義』（1796年、島津重豪が命じて江戸立の二人の「琉球人」使者、鄭章観と蔡邦錦から江戸屋敷において中国情報を聞き取ってまとめた書）と比較し、共通して関心が持たれた中国情報やそれぞれに記された特徴的な中国情報を明らかにしていく。

## 3. 研究の方法

(1) 『大島筆記』の善本の収集をはかる。当面の具体的な収集場所として、国会図書館、国文学資料館、内閣文庫、法政大学沖縄文化研究所等を調査対象にする。

(2) 高知県に赴き、『大島筆記』を含めた他の琉球船漂着資料やそれに関連する資料の収集をはかる。具体的な収集場所として、高知県立図書館、高知市民図書館、土佐山内家宝物資料館等、宿毛市立坂本図書館、土佐清水市立市民図書館、大洲市立図書館を調査対象にする。また、琉球船が漂着した宿毛市大島や土佐清水市、四万十市等の現地調査をし、漂着地で亡くなった「琉球人」が埋葬されている「琉球人墓」等を確認する。

(3) 琉球船の乗組員の調査のために沖縄県に赴き、家譜等の調査、及びそれに関連する資料調査をする。具体的な場所として、那覇市歴史博物館、沖縄県立図書館、琉球大学附属図書館、沖縄国際大学南島文化研究所、浦添市立図書館沖縄学研究室等を調査対象にする。

## 4. 研究成果

(1) 現在最良の本である国会図書館本『大島筆記』を善本である山内文庫本、内閣文庫本『大島筆記』と対校して、翻刻した。今日、活字化されて広く利用されてきた資料は、『日本庶民生活史料集成 探検・紀行・地誌（南島篇）』第1巻、谷川健一他編、三一書房、1968年刊に収められた『大島筆記』が唯一であるが、これは白川本（京都大学図書館蔵）を活字化した資料である。その初出は、『海表叢書』第3巻、新村出編、更生閣書店、1928年刊に収録され、後に『南蛮紅毛史料』

第1輯、新村出編、更生閣書店、1930年刊に入ったものである。しかし、「白川本」には「雑話下」を中心に31箇所にもわたる欠落があることが指摘されている（「宝暦十二年琉球国船漂着記録『大島筆記』諸本について」横山学『生活文化研究所年報』第11輯、岡山ノートルダム大学、1997年刊）。今回、翻刻した国会図書館本はその欠落箇所がない善本であり、同様な善本である山内文庫本や内閣本との対校を記して、『大島筆記』のテキスト作成の基本を作った。

(2)『大島筆記』と同時期の漂着資料「琉球船漂着記」と「豊敷公紀」第134巻「宝暦十二年七月二十二日」記事を翻刻し、『大島筆記』との比較研究の基礎を作った。「琉球船漂着記」は『大島筆記』と比べて、報告書としての性格の強い資料であり、分量の少ない資料ではないが、『大島筆記』には見えない宿毛大島に曳航されるまでの次第や琉球船のやや詳しい情報、積み荷に関する情報が見える。また、『大島筆記』と同様の「聞書」資料を含むが、その性格は「琉球人」に直接接する立場の者の「聞書」というよりも、外部から観察した性格が強い。したがって、それにより『大島筆記』の「聞書」資料の豊かさや広がりや照射する資料にもなる。また、これと比較することにより、『大島筆記』が「琉球人」から提出された資料と「琉球人」から「聞書」された資料を分類整理した、琉球及び琉球を通した中国情報を記した地誌的な内容の随筆であることが、明らかになる。また、「豊敷公紀」はさらに行政報告書的な内容の資料で、特に琉球船が薩摩藩に迎えられて鹿児島経由で帰還する様子が窺える資料である。

(3)『大島筆記』の著者、戸部良熙の随筆集『韓川筆話』（国会図書館蔵）から琉球関連を抜き出し翻刻して、『大島筆記』を分析する基礎を作った。『韓川筆話』（1769年）は全十巻、427話の章段からなる書（松山白洋「土佐歌人群像（十）」『土佐史談』第41号、1932年刊）であるが、これに第6巻、第7巻を中心に10章ほどの琉球にかかわる章段がある。特に第7巻の「朝安気之茗」には、戸部良熙と潮平親雲上とが土佐からの帰還した後に、「小翰」を添えた茶の贈答を相互に行ったことが記されていて、『大島筆記』後の両人の交流が分かって興味深い。また、随筆には『大島筆記』に「船頭雇」と記される永峯筑登之（平世祥）の名も出てきて、戸部と永峯の交流も知れる。永峯は『大島筆記』にも度々登場する人物で、三線を弾き琉歌を謡い、また「唐話」も話す人物である。『大島筆記』の附録に「永峯和文」があるが、永峯は平家の落人伝説を持つ、新参士族である（『氏集 首

里那覇』増補改訂版、那覇市市民文化部歴史博物館、2008年刊）。戸部はこの永峯にも注目して、琉球及び中国情報の「聞書」をしたと想像される。さらには、『大島筆記』に記されない内容を持つ章段（「草の名」や「尚左」）もあり、『大島筆記』に記されなかった「聞書」の存在を想像される。すなわち、『韓川筆話』の存在は、『大島筆記』の奥行きを考えさせる資料であり、この資料の翻刻は大きな意味を持つ。

(4)『大島筆記』の主要な情報提供者である潮平親雲上（翁士璉）に関わる新たな資料を家譜資料等の調査から見つけ出し、潮平の土佐国へ漂着するまでの履歴の一端が明らかになった。潮平親雲上の家譜は現在不明であることから潮平の履歴は、『大島筆記』に記されている範囲でしか分からない。従って、例えば潮平が「十五箇間切五千人」の強訴事件に対処した記事が『大島筆記』に出ていても、これがどの間切の強訴事件であったか『大島筆記』を読む限り不明であるが、家譜資料や潮平と親しい関係にあったと考えられる麻姓（渡口家）の「真安日記」を資料にして書かれた『麻氏兄弟たち』（渡口真清、自家版、1970年刊）等により、土佐国漂着にいたるまでの潮平の履歴の一端が解明された。その成果は、以下である。

- ・乾隆13年（1748）6月徳川家重襲位の賀慶使の供として江戸に赴き、翌年6月に帰国する。
- ・乾隆17年（1752）6月尚穆王即位の恩謝使の使賛官として江戸に赴き、翌年4月に帰国する。
- ・乾隆21年（1756）明年の冊封使、来琉を告げる飛脚になって上臈する。
- ・乾隆22年（1757）12月に接貢船の官舎として渡唐し、翌年11月に帰国する。
- ・乾隆25年（1760）5月から翌々年2月まで具志川間切下知役を勤める。「十五箇間切五千人」の強訴事件に対処したのは、この時期である。
- ・乾隆27年（1762）4月から翌々年の12月まで、琉蔵役を勤める。ただし、鹿児島への赴任途中で海難に遭い、乾隆27年（1762）7月に土佐国に漂着し、同年10月に鹿児島に廻船される。

(5)『大島筆記』附録、及び「宇留麻話」所収の「琉歌」等の翻刻・解説を行った。『大島筆記』附録には、「琉球歌」と題される56首の琉歌が収録されている。琉球における最も古い琉歌集は、1795年から1802年に編纂

された『琉歌百控』であるが、それと比較すれば『大島筆記』附録に収録された「琉球歌」はそれより古いまとまった琉歌集ととらえることができる。しかも、それぞれにウタの注や詞書きが付されており、その記述は相当に正確である。これは、琉球において祝言歌の代表とされる「カヂャディ風節」を辞世歌と解釈した（『椿説弓張月』）近世期の本土日本の琉歌理解を考えると、極めて貴重な資料だといえることができる。そして、それは歌論に相当する資料が乏しい琉球においては、近世期の琉歌理解を窺うことができる重要な資料なのである。また、「宇留麻話」に収録された琉歌（琉歌形式の「春歌」を含む）、近世歌謡は、整然とした資料ではないものの、それがかえってウタが歌われた「琉球人」と土佐の役人との宴席の状況を伝える資料となっており貴重である。すなわち、「琉球人」が歌うウタは琉歌と近世歌謡が截然と分けられたものではないことが考えられる。これは、二つの「ウタ」を区分して捉えていた我々の認識を再考させる資料なのである。また、この資料によって、逆に『大島筆記』附録の「琉球歌」が相当に整理・精選された資料であるということが知れる。

(6) 『大島筆記』等に記される説話資料から琉球の天女伝承を考察した。『大島筆記』には、世間話として流布した「天女伝承」が記されている。これを『琉球国由来記』等に記される「エボシガワノ嶽」に記される「天女伝承」や銘苅子伝承等と合わせて考察すると、「天女伝承」を伝える地が首里を挟んで東西に異なる時空間になっていることを論じた。

(7) 『大島筆記』が記された漂着（1762年）に前後する漂着資料、「清水浦琉球船漂着聞書」（1705年）や「宇留麻話」「下田日記」（1795年）等を収集して、『大島筆記』を分析する資料を整えた。

(8) 「研究の目的」にあげた事柄のうち、手が付けられなかった項目等が、今後の課題である。以下、それを記す。

・さらに、『大島筆記』善本の調査収集をはかる必要がある。本課題研究としては、「宝暦十二年琉球国船漂着記録『大島筆記』諸本について」（横山学『生活文化研究所年報』第11輯、岡山ノートルダム大学、1997年刊）により国会図書館本（戸部良熙が「教授役」を勤めていた土佐藩の藩校「教授館」の押印がある）や山内文庫本等を善本にして翻刻を試みたが、横山があげていない『大島筆記』の調査収集をはかる必要がある。

・『大島筆記』に記される琉球を通じた中国情報の分析がある。これは、『琉客談義』との比較を予定していたが果たさなかった。

・『大島筆記』に記された琉球語（琉球方言）の他資料との比較分析。これは、『大島筆記』が書かれる際の参考資料にされたと考えられる『中山伝信録』に収録された「琉球語」や1795年の漂着資料「宇留麻話」等に記された琉球語との比較分析が果たされなかった。

・『大島筆記』附録に収められた「琉球人和歌」や和文「雨夜物かたり」「永峯和文」についても今後の課題となった。「琉球人和歌」や「雨夜物かたり」は、いずれも潮平等の土佐国漂着から28年前に友寄安乗とともに薩摩役人への落書事件によって磔の刑になった平敷朝敏に因む作品である。これをなぜ潮平等が携えていたか興味深い。携えていたのは、潮平ではなくて「永峯和文」の作者、永峯筑登之である可能性を考えるが、いずれにしても、『大島筆記』附録の和歌・和文は当時における平敷朝敏とされる文学の享受を考えさせる重要な資料である。しかし、この解明は今後の課題に残った。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

- ① 島村幸一 『大島筆記』附録所収の「琉球歌」『立正大学人文科学研究年報』、立正大学人文科学研究所、査読有、第47号、2010. 3、pp. 109-137
- ② 島村幸一 「琉球孤の神歌の人称表現—宮古島狩俣の神歌から—」『口承文芸研究』日本口承文芸学会、査読有、第34号、2011. 3、pp11-22
- ③ 島村幸一 『大島筆記』に関する資料『立正大学文学部論叢』立正大学文学部、査読有、第134号、2012. 3、pp. 39-77
- ④ 島村幸一 「琉球船、土佐漂着資料にみる伝承的記述をめぐって」『奄美沖縄民間文芸学』奄美沖縄民間文芸学会、査読有、第11号、2012. 3、pp. 55-65
- ⑤ 島村幸一 「琉球船、土佐漂着資料の世界」『法政大学沖縄文化研究所所報』法政大学沖縄文化研究所、査読無、第70号、2012. 3、pp. 1-3
- ⑥ 島村幸一 「久高島行幸のオモロー「久高島由来記」（『恵姓家譜』）とかかわって—」『立正大学大学院文学研究科紀要』立正大学大学院文学研究科、査読有、第28号、2012. 3、pp91-140

〔学会発表〕（計1件）

- ① 島村幸一 「琉球船、土佐国漂着資料所収のウタ」奄美沖縄民間文芸学会沖縄大会、沖縄国際大学、2010. 9. 23

〔図書〕（計 1 件）

- ① 島村幸一 『『おもろさうし』と琉球文学』  
笠間書院、2010. 3、pp.1-773

6. 研究組織

(1) 研究代表者

島村幸一 (SHIMAMURA KOICHI)  
立正大学・文学部文学科・教授  
研究者番号：70449312